

源流人会だより

ぽたたい!

源流のひとしづく

第3号

2004 夏号

森と水の源流館

住所 ● 奈良県吉野郡川上村宮の平
財団法人吉野川紀の川源流物語
TEL ● 07465・2・0888
FAX ● 07465・2・0388
URL ● <http://www.genryuu.or.jp>
E-mail ● genryuu@joy.ocn.ne.jp

CONTENTS

- ・源流学講座
- ・コラム/川上村の主役たち
- ・シリーズ『吉野川源流-水源地の森』
調査報告～鳥類～
源流人会活動報告
- ・いろいろばた教室報告
- ・イベント案内
- ・館からのお知らせ

『源流学講座』 連載スタート ミュージアムショップオープン



水の季節来たれり 水たまりのイモリ

ニホンイモリ (イモリ科)
2004年5月
水源地の森にて

雨が降り増水のたびに、川辺に小さな水たまりができます。そこではイモリをよく見かけます。写真の撮影2日後、水たまりは小さくなりイモリは消えていました。今度はいつ姿を見せてくれるでしょう。

ぽたたい

源流のひとしづく

夏
第3号

発行所 ● 財団法人吉野川紀の川源流物語 財団法人吉野川紀の川源流物語 TEL 07465・2・0888

発行日 ● 平成16年7月発行

森と水の源流館に お店ができました

この春より、森と水の源流館の片隅にミュージアムショップがオープン。水質浄化に関わるグッズや小枝、源流の自然・歴史・民俗・文化に関するものをそろえてゆきたいと思っています。今号では、当館オリジナルの書籍を紹介します。



清流の語り部たち

約500世帯と役場など村の中心地が沈むことになる大滝ダムの完成を控え「ダムに沈むその前に」との想いで4年前から進められた、吉野川の思い出を集め、寄せられた貴重な昔の写真や、聞き取り調査で集まった「川の記憶」をまとめ、開館2周年(4/29)に写真集として発刊しました。川上村の人々にとって吉野川は、集いの場、学びの場、信仰の場、仕事の場。川から遠ざかってしまった日本人にとって、懐かしい一冊です。
1冊1,500円(税込み)



ふたつの龍のはなし

吉野川のほとりに建つ古い神社は、昔から龍神様がすむ所として村の人びとに大切にされてきました。ところが、その場所がダムが作られることになり、困った村人たちに龍神様は・・・
川上村が大滝ダムの建設を受け入れるまでの経緯と、村民の想いを子どもたちにも分かりやすい民話風の絵本にまとめました。
1冊500円(税込み)



水源地の 森守 募金

去年の森守募金 692,922円

昨年は160口以上の個人・団体・学校の方々からたくさんの募金をお寄せ頂きました。

源流に届いた皆様のご厚意は、副読本『水の旅のはなし』に姿を変え、下流に住む子どもたちの手もとへと届き、吉野川・紀の川の水の恵みの大切さを伝えています。

口座番号
0095-2-331164
『水源地の森守募金』あて

副読本「水の旅のはなし」

副読本『水の旅のはなし』はこれまでに42,000人の子どもたちに配布し、5月の遠足シーズンには子どもたちが副読本を片手に熱心に見学している姿をみることが出来るようになりました。さて、9月12日(日)には恒例の「募金キャンペーン」を実施します。みなさんぜひご参加ください。



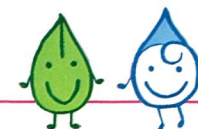
源流人募集

源流人とはかけがえのない水を生む源流の自然を愛し、源流を守り、育てる人です

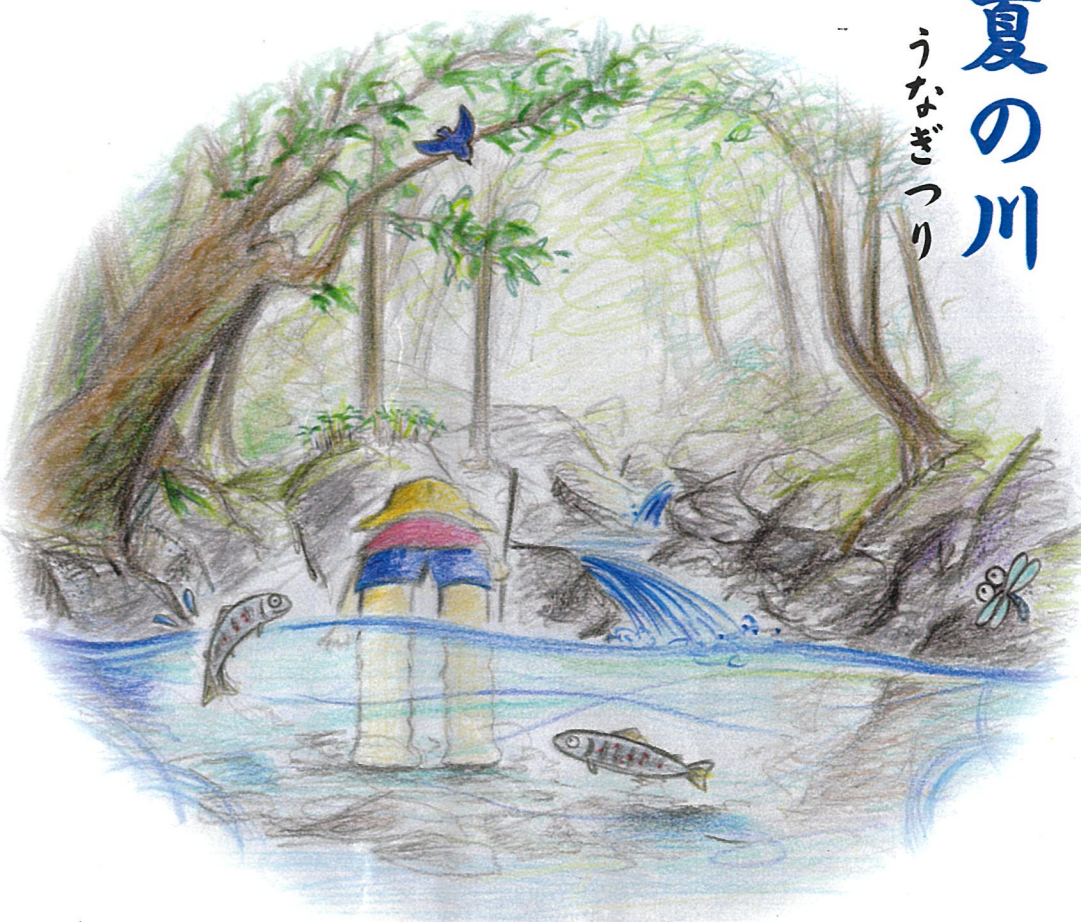
源流人会とは集い、話し、遊び、学び、考え、触れ、交流し、参加し、喜びを分かち合いながら、源流を守り、育ててゆこうとする会です

◆ ともに源流学を楽しみ学ぶ仲間をご紹介します ◆

年会費：個人2,000円/家族3,000円
学生1,000円/団体10,000円
郵便振替00940-1-331163



編集後記
今年こそは季刊で夏のはじめに出そうと思っていたのに、ドタバタでこんなに遅くなってしまいました。お待ちいただいたみなさん、ほんとうにごめんなさい。このころ、ろ、どの季節も早く通り過ぎてしまふみたい。空を流れる雲みだいにのんびり風を感じたい今日このころです。



ホームページに「初夏の思い出」ということで昔の鮎の解禁（6月1日）の様子を掲載させてもらいました。それから約2ヶ月を経た8月の川がどうだったか。

56年からは大滝ダムの工事が始まり様変わりしていく川を見てきました。とは言え水量を量ったわけでもなく、水温、水質などの変化も科学的には分かりません。しかし、見た目にも、川に入った状態、水中眼鏡で川を覗いたときに変化を感じて来ました。

盛夏になると鮎もだいぶ大きくなっていました。夏休みは毎日川での遊びの日々でした。ウナギ釣りもいっぺんだけおもしろい目に遭いました。昼釣り用のウナギ釣り針が夜づけ用の針とは別にあつて、餌は鮎の切り身やミミズを使いました。中学生のころ兄といっしょに東川の青木にあつた第一中学校の少し下流の大きな岩の周辺でウナギ釣りをしました。岩が地面と接している部分に穴があつてウナギが棲みつき入りしている、穴の下の部分がこすれてきれいになっていると聞いていたので穴を探すと、きれいな穴がありました。さつそく鮎をかみそりで小さく切つて針に刺し、穴の口にもつていくとパクリ！ウナギがすばやく出てきて餌をくわえて中に引つ込みました。ここで慌てて糸を引いてはいけません。ゆっくりと餌を飲み込ませてから、そつと糸を引くのです。糸がピンと張つたら力を入れてウナギを引き出すのです。その場所で5匹のウナギを釣りました。その後何年か経つてその場所に行つたのですが、コケと泥とが岩を覆い、穴も汚れたままでした。

坂口泰一

川上村の主役たち

溪流にすむカジガエル（河鹿蛙）

美しい鳴き声は古くから知られ、詩歌などに詠まれています。美声を楽しむための飼育の歴史も長く、当館の館長は子どもの頃、大峯山の修験者に河鹿蛙をお土産として売り、そのお金で蒸しパンを買つたという美味しい思い出があるそうです（売り上げの大半はガキ大将のものに！）。繁殖は4〜8月。オスはさかんに鳴いてメスを誘います。体の色は川原の石に似た灰褐色で見つけにくいですが、ファイファイというやさしい声は、村内のあちこちで聞くことができます。産卵場所は川の中の岩の下。おたまじゃくしは岩についた藻類などをたべ、8月ごろ変化した子ガエルは、ガガンボやトビケラなど小型の昆虫をたべます。いつまでも河鹿蛙の声がひびく川でありますように...



♂約40mm、♀約85mm

イベント案内

8月

- 15(日) 縄文生活の解説と石のナイフづくり
時間: 10:00~15:00 定員: 各10人 参加費: 500円
●29(日) 水源地の森ツアー
時間: 9:30~16:30 対象: 小学生~ 定員: 20人
参加費: 大人3,200円(3,500円) / 小中高1,800円(2,000円)
夏休み!クラフト体験
~8/31まで
■吉野杉の箸づくり: 8/31まで ■ストーンペイント: 8/9~14
■小枝の工作: 8/2~7 ■竹細工: 8/16~20
■葉っぱのしおり: 8/23~31
時間は事前にご確認ください。料金は各100円+入館料(源流人会会員は無料)
企画展「山の暮らし ~縄文と現代(いま)~」
~8/31まで
川上村には、自然と共生していた縄文時代の生活の知恵が残されています。そんな生活の道具と縄文時代の石器を展示し、ゆったりとした山村の生活を紹介します。

9月

- 12(日) 第3回 森守募金キャンペーン
吉野川・紀の川の水が届く地域には、水について、川について、あるいは川や水を通じた人のつながりについて、様々な思いをもっている人たちがいます。そんな人たちが集まって、自分たちの活動に関わる思い思いのお店を出し、自分たちのメッセージを発信する、そんな縁日を計画。源流人会会員のみなさんも、是非出展してみませんか? 詳しくはお問合わせください。
和歌山市水道局 紀の川河口の水と源流の水の透明度比べ
●19(日) 源流学の森づくり(会員限定)
時間: 9:00~17:00 対象: 小学5年~
参加費: 大人1,500円 / 小中高1,000円
●26(日) もりみず探険隊「日本一古い人工美林をたずねて」
時間: 9:00~17:00 対象: 小学生~ 定員: 25名
参加費: 大人3,200円(3,500円) / 小中高1,000円(1,200円)

今月の館内クラフト体験
葉っぱのしおりづくり
毎週土日
(時間はお問合わせください)
しおり2枚で100円

楽しい企画をつくってみませんか

9/12(日) 森守募金キャンペーンでは、館を訪れた人に源流の森のこと、水のこと、川上村のこと、流域のつながりのこと、などなど...そんなことをテーマに、楽しんでもらえるような出しものを考えています。この企画をいっしょにつくりあげてくれる人を募集しています。当日は無理だけど提案だけならOk! 当日の雑用なら手伝うよ! 思いつかないけど肉体労働ならまかせて!...どんな関わりでもかまいません。こんなことならできるよ、こんなことしてみたら? と、ちょっと気になる人は、お気軽にご連絡ください! 楽しい1日がいっしょにつくりあげましょう。



報告 いろいろばた教室 (民俗講演会)

川上村、吉野川・紀の川流域、紀伊半島をテーマにした民俗講演会。民俗調査とともに、「源流学」の一分野を担います。



講師 石本 伊三郎氏 (川上村文化財保護審議会会長)
梶川 熊太郎氏 (川上村「七保」総代長)
前田 剛氏 (川上村「四保六保」総代長)

行事です。石本氏は歴史上、重要な役割を果たしてきた吉野地方の特色や「精神的美学」として村に息づく後南朝にまつわる川上村の民俗についてお話ししてくださいました。

「後南朝の歴史」は、教科書にも載らない影の歴史です。それゆえ様々な説があり、史実は確かではありません。しかし、川上村では口伝で代々伝えてきた歴史をいわば「信仰の対象」として、また自分達の文化として、村人の精神的な支えとしてきたことが明らかになりました。

*後南朝：南北朝時代(1336~1392)に引き続き、南朝と北朝の争いが続いた時代。

第5回

「不動さんのおまつり」と大峯山ハイキング」

川上村には、7月に世界遺産登録された大峯山修験道の修行場やルートがあり、5月3日は鍾乳洞で有名な「不動窟」で、修行場の「戸開け



式」が行われます。参加者はおまつりごとの見学の後、辻谷達雄館長の案内で古道をハイキングしました。古道の道々にはお茶屋の跡などが見られますが、草もちなどを売りに行ったという昔話を村内の女性から聞くことができます。約1300年もの間、修験者たちは時に命を落とすほどの厳しい修行に励んできましたが、川上村の人々もまた、そんな信仰の山々を支え続けてきたのです。そして、険しい山々が連なる大峯山ですが、人を寄せ付けないのではなく、反対に全国から人・モノが集まる要素を生み出したといえるでしょう。

民俗調査 アシスタントボランティア大募集!

川上村の1年は、豊かな民俗行事に彩られています。今年から3年計画で川上村民俗調査を始めます!

調査者のアシスタントをしてくださる方を募集します。普段知ることのできない多彩な「源流 川上村」の民俗にふれられるチャンスです。また、調査を担当される研究者から貴重なお話しが聞けるかも!お気軽にお問い合わせください。



▶1100年の伝統「弓全式」(村指定無形文化財)



▲1100年の伝統「法悦祭」

【内容】各集落での聞き取り調査や、伝統行事の取材などのアシスタント *交通費や食費などはご負担ください。 *1年単位のお申し込みもできます。

源流学講座

辻谷達雄 館長

次号より
スタート



源流学の森づくり



2003年源流人のつどい

源流学講座を始めるにあたり一言。あまり難しく考えずに、肩の力をぬいて自然体でのぞむこと。

まず、源流とは難しい定義はさておき、文字通り、流水の最初の一滴が生まれるところ。アマゴやタカハヤのすんでいるところ。山村としての暮らしをしているところ。と、いうことで、吉野川・紀の川の源流である川上村全体が源流と言えますが、その中でも、最上流域に位置する三之公原生林は、大台ヶ原より連峰する台高山脈に接し、三重県宮川村に至る、歴史や文化の残るところであり、川上村においても数少ない原生林であります。その場所をフィールドとして、講座を進めてゆきたいと考えています。

源流で学ぶことは山ほどあるので、時間をかけて気長に取り組んでゆきたいと思っています。学びたいテーマの例をあげると水のこと(雨・川・魚、水生昆虫、水温の変化、水量の変化、等)、樹のこと(樹種、樹名、花、巨木等の生態)、森の気象(風・雪・温度、台風等)、土のこと、動物の生態、鳥のこと、歴史のこと(後



第4回源流塾「猟師に学ぶ水源の森」

南朝史)、等など、数え切れないほどありますが、学んでゆく中で、自然と人間との関係の物語等ができれば幸いと思っています。

そのためには自然と人が親しくなること「百聞は一見にしかず」、という言葉がありますが、文字通り、「百学よりほんものの森に入り、体感すること」が、まさに源流学です。

とは言っても最初は森や川を上手に歩くのは大変難しいと思います。森に入る前の予備知識として服装、心がまえ、危険なことへの対処の仕方等、自分の安全は自分で守る、自己責任を守って、森のルールに従って行動する。このようなところから源流学講座を始めたいと思っていますので、どうぞ、おたのしみに。



山村の食文化を学ぶ 柿の葉寿司づくり



のこぎりの目立て



かまどぎ 道具の手入れを学ぶ

今回の調査で最も多く確認された種はオオルリです。オオルリは溪流近くの岩や崖地にコケ類を多量に用いた巣をつくります。水源地の森では、明神谷・キノコ股谷・馬の鞍谷などの主要な渓谷のほか、この渓谷に合流する多数の谷筋があります。これらの渓谷や谷筋にはオオルリの営巣に適した崖地が多く、巢材となるコケ類も豊富に生育しています。

また、水源地の森は、低木や草本などが藪を形成しているところはほとんどありません。そのため、このような藪に好んで生息する低山地から山地にかけて普通に見られるウグイスがほとんど確認されていません。同じような環境に生息するヤブサメについても同じです。

水源地の森では58種の鳥類が生息していますが、果実を採食することによって種子を分散させたり、鳥類は植物を食害する昆虫類を捕食したり、また、鳥類そのものが他の肉食性の哺乳類や鳥類の餌になるなど、いずれの種も水源地の森の生態系を維持していく上で欠かすことのできない存在です。これらの種が今後も生息し続けることができるように原生状態を維持していくことが必要です。ただし、前にも記したように林床に生息する鳥類が非常に少ないことが水源地の森の生態系の問題点です。水源地の森の林床をいかにして回復させていくのが重要な課題のようです。

重さたった15gの1羽の鳥（シジュウカラの例）が生きてゆくためには、1日に300～350匹の虫が必要です。彼らが子育てをし、生きてゆくためには、多くの虫とその食料となる植物が必要です。植物が生育するためには土壌が必要です。土壌をつくるのは誰・・・？と考えると、全ての命がつながっていることがわかります。森は漢字では木が3つですが、その木とつながるいろんな生きものを、今後も紹介してゆきたいと思います。

カモ目	(1科1種)
タカ目	(1科2種)
キジ目	(1科2種)
ハト目	(1科2種)
カッコウ目	(1科2種)
フクロウ目	(1科1種)
ブッソウ目	(1科2種)
キツツキ目	(1科4種)
スズメ目	(18科42種)

こんな源流部にも外来種が・・・

鳥たちは、春から夏にかけて子育ての季節です。なわばり宣言と、メスへのPRのため、オスたちは美しい声でさえずります。2年前、川上村で初めてきいたさえずりは、なんとなくクロツグミに似て聞こえたのですが、でも違う・・・一体だれ？ それは、ソウシチョウでした。本来、日本にはいない鳥ですが、水源地の森の川向、源流部の森周辺ではにぎやかにさえずっています。ソウシチョウは水源地の森の代表種ではありませんが、外来種代表として、紹介しました。ひょっとしたらみなさんの家の近くにもいるかもしれませんね。この現象、どう思われますか？

ソウシチョウ（スズメ目チメドリ科）〈留鳥〉

東アジア原産で、愛玩用として持ち込まれたものが「籠脱け」により野生化しました。自然林の下層植生であるスズタケ&ミヤコザサ群落をその主な繁殖環境として分布を拡大しており、丁度そういった環境を好んで生息する在来種のウグイスやコルリ等に悪影響を与えるのではないかと心配になる位の増加ぶりです。スズタケ群落の少ない水源地の森には数は多くありませんが、スズタケ群落の発達した周辺の森には、沢山生息しています。



かつて山から切り出された木は、筏に組まれ川を下り和歌山まで運ばれました。川はモノと人をつないでいたのです。今日、山や川の様子はすっかり変わりましたが、流域に暮らす私たちは、どのようにつながっていくことができるでしょうか・・・。



パネリストのみなさん



吉野川・紀の川 かわばた会議が開催されました。

2004
4. 29

”海までとどけ源流の水”それぞれの思いを込めて“をテーマに、5名のパネリストが参加。かつらぎ町から、有機農法に取り組み戸西葉子さん、初桜酒造のご主人、笠勝清人さん、和歌山市立四ヶ郷北小学校教諭の今中知恵さん、環境にやさしい農法を進める和歌山市在住の園井信雅さん、そして川上村に生まれ長年林業に従事、鮎釣り名人の杉本充さん。

せない水、笠勝さんはこれまで地下水への関心が主でしたが、川についても考える必要性を語りました。今中さんは、子どもが源流の水を見た時の驚きや感動の様子を話し、子どもには体験が一番大事。木や森の大切さを伝えて行きたいと語りました。「子どものころは遊びというより、小さな狩人だった」という園井さんは、そのすり込まれた体験がいきいてると話しました。杉本さんは、昔の美しい川の様子のほか、山が疲れている、部分的に自然林の森を育てることが川や水を守ることに繋がると、山仕事の視点から提言。水源地の村づくりへの応援を求めました。

客席から、川上村婦人会のEM菌を使った生活雑排水の浄化活動を紹介します。松本修さんは上流が強く意識するためにも、下流から「きれいな水を流してほしい」と声が上がればと訴えました。

かわばた会議に参加して、初めて下流域の人達の生の声をきくことができ、大変参考になりました。こうした会議をどんどん広め、流域住民が協力して清流を守る「草の根運動」が必要だと思いました。

村が購入した原生林の外に、既に伐採され荒れ放題になっている広大な山地が心配です。川上村から和歌山市に至る流域住民が一致協力、募金活動などで山地を購入、流域住民の共有財産として次世代にバトンタッチできたらとの思いが私の夢です。

(川上村 松本修)

源流人のみなさんの感想

和歌山県の方々は、上流の川上村が広大な「水源地の森」を購入して清らかな水を守る努力をしている話や、吉野川のクリーンキャンペーンを釣り人がしている話に驚いている様でした。また、これから吉野川・紀の川連絡協議会をつくって、力を合わせて清流を残していきたいとの発言もあり、これからは川上村から川の情報発信を続けなければと感じ、意義のある1日であったと思います。

(杉本充)



この調査は、吉野川・紀の川の源流部に位置し、川上村が購入し、保全している原生林「水源地の森」の保全を進めるための基礎調査として、この森と水の源流館に生育・生息する動植物の現状を把握するための基礎データを得るものです。

期間：2003. 11～2004. 3
調査地域：水源地の森
(全740haのうち382ha)
調査項目：植物・巨樹・哺乳類
鳥類・両生類
は虫類・魚類
底生生物・陸上昆虫類

調査期間：冬 季（越冬期）：2002. 12. 11～13
初夏 季（繁殖期）：2003. 5. 26～28

水源地の森で見られる鳥類は、この森が発達した原生林であることから森林性の鳥類が大部分を占めています。そして、標高が約500～1000mに位置することから山地性の鳥類が多数生息していることが特徴です。鳥類相としては、紀伊半島の山岳地帯では一般的に見られる種が多くを占めています。ただし、水源地の森ならではの特徴もあります。

水源地の森を特徴づけるのは、①生態系の頂点に位置するクマタカが生息していること、②溪流付近で繁殖するオオルリ・ミソサザイ・カワガラスの個体数が多いこと、③発達した森林に生息するオオアカゲラなどの中型のキツツキ類・コノハズク・キバシリが生息していること、④低木・草本層などの藪に生息する種の確認数が少ないこと、などがあげられます。今回の調査では、目視観察と鳴き声の聞き分けで、留鳥35種、夏鳥9種、冬鳥12種、冬鳥一部留鳥2種の、計58種の生息が確認されました。内、「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物－レッドデータブック－（鳥類）（環境庁、平成14年）」における記載種は2種、クマタカ（絶滅危惧IB類）とサンショウクイ（絶滅危惧II類）でした。

今回はその中から一部、代表的な種とその生態を簡単に紹介します。

クマタカ（タカ目タカ科）〈留鳥〉

水源の森の食物連鎖の頂点に立つ大型の猛禽類です。かつては「鷹狩」にもよく用いられました。急峻な斜面に生えたツガやモミ等の横枝の張り出しの多いしっかりとした大木に巨大な皿型の巣を架けてヒナを育てます。



※

ミソサザイ（スズメ目ミソサザイ科）〈留鳥〉

三之公川流域の溪畔林に沢山生息しています。3月ころから♂は縄張を持ちはじめ、苔むした岩の上に止まって、その小さな体からは想像できないほどの大きな声でさえざります。石の間や木の隙間などにコケを使って美しい巣を作ります。



イスカ（スズメ目アトリ科）〈冬鳥〉

モミ・ツガ・ゴヨウマツ等の針葉樹の自生の多い水源地の森に、厳寒の冬に渡来する真っ赤な美しい小鳥です。「ギョギョギョ・・・」と鳴きながら飛び回り、針葉樹のコーン（松ボックリ）に止まり、中の種子を食い違ったクチバシでほじくって食べます。



オオルリ（スズメ目ヒタキ科）〈夏鳥〉

谷底を清冽な溪流が流れる谷間の広葉樹林に4月ころに渡来して繁殖する美しい小鳥です。青・黒・白の美しい♂は、渓谷に突き出た樹木のとっぺんに止まって、涼しげな声で盛んにさえざります。水源地の森を代表する夏の渡り鳥です。



留鳥：ある地域で1年中見られる鳥。 夏鳥：春に南の地域から渡ってきて繁殖し、秋には南の地域に帰る鳥。
冬鳥：春から夏にかけて北の地域で繁殖し、秋に日本に渡来して越冬し、春には北に帰る鳥。

源流人会活動報告

4 / 18・6 / 6 源流学の森づくり

4 / 18 (日) 快晴

今年度、第1回(通算第3回)「源流学の森づくり」が行われました。第1回ということ、あらためて、源流学の森を知ろうという目的で開催しました。もちろん春の森を楽しみながら・・・。

まずは、森の全貌を見るため、標高約630mの尾根まで、30分ほどかけて登りました。鳥のさえずりも清々しく、尾根からは、原生林「水源地の森」と連なる山々が見渡せます。「水源地の森」では大木のモミの木も、足元では1m少しの大きさ。この木が水源地の森くらいの木に育つにはまだ200〜300年はかかりそうです。

尾根から降りると、待ちに待った山菜天ぷらです。川の水で粉を溶き、タラやリョウブの芽、サンショウなど、約10種類の自然の恵をいただきます。

お腹も満たされたところで、辻谷館長の指導のもと、それぞれが、ナ



コシアブラの木でつくった笛



たくさんの山菜

タガマとノコギリを手に、斜面を横一列になって除伐作業を約1時間行いました。

今回は、源流学の森が、どう変化してゆくのかを調べてゆくため、まずは、水温や水量、生育する植物と動物のフィールドサイン(フンなどの痕跡)を記録しました。興味深かったのは、参加者の一人が、合流する二つの谷で水の味が違うと感じたこと。今後、いろんな角度で森をみてゆきたいと思います。

●「源流学の森」って？

吉野川・紀の川源流部の原生林、「水源地の森」の川向に20年ほど前に伐採された天然林があります。その一角をお借りして源流学の森と名づけました。伐採後、自然に再生しつつある若い天然林は今ほうとうそつとしたやぶです。源流学の森づくりは、再び原生林のような森にもどすことが目的ではありません。「学」の森なのです。源流の森や風に耳をかたむけ、実体験とおして、生きる力や様々なことをともに楽しみながら学び考え実行してゆく、そんな場なのです。

6月6日(日) (水温14℃)

関西入梅日 雨が降りそうな曇

第4回「源流学の森づくり」は実際にどのような植生をしているかを知ることが目的におこないました。

まずは、樹木の性質などの解説を聞いて記録しました。そして、特徴を確かめながら杉板に墨汁で樹木の名前を書き、木の幹に取り付ける作業を行いました。

お昼、館長こと達っちゃんに雨が雨に備えて張ったテントと焚き火でお出迎え。鍋には、川上村ではアセと呼ばれるアシ(別名ヨシ)の葉で包んだ、達っちゃんの奥さん手製のちまきがゆであ

がっついていました。テントも焚き火も岩や木、枯れ木など自然の地形やものを利用したもの



マルツツトビケラの仲間

ネームプレートを作成した樹木9種

- ・カラスザンショウ
- ・アカメガシワ
- ・ケケンボナシ
- ・フサザクラ
- ・エゴノキ
- ・クサギ
- ・ヒメコウゾ
- ・ユズリハ
- ・クマノミズキ



で参加者も「見事や」と感心するほどでした。また、沢の生きものを観察すると、ヤマトビケラが最も多く見られ、他にマルツツトビケラの仲間なども観察できました。午後の作業は、前回同様密生した木々の除伐です。林床に光があたる場所が徐々に広がってきました。今回「源流学の森」では、初めてヤマビルが確認されました。この森の入口から森林内にかけてたくさんシカ糞が見られたことから、シカが運んできたのかもしれない。以後、作業の前にはヤマビル対策が必要になりました。